

フィールド風

(現場)からの風

宮田守男

昨年12月から、白馬村の文化事業に縁の深い元NHKチーフプロデューサーであり現在名古屋学芸大学メディア造形学部客員教

授の加藤和郎さんから毎月10日ごとに全国で発行されている新聞の一面コラム情報を、地域に役立たせてほしいと配信いただくようになった。地域振興の観点から大北地域にも関係するコラムは、積極的に情報を伝えていきたいと思っ

地域課題を自らの問題と意識する事が大切だ

1月18日の東京新聞の筆洗さんの「プラスチック浪費に宣戦布告」のコラム、愛犬の「ふん」を拾い、わざわざ分解しにくいポリ袋で「包装」して捨てる消費の在り方から、野菜でも何でも、や

らときれいにプラスチック製品で包装されているが、その多くはごみとなる。全世界でごみとなって海に流れ出すプラスチック製品は年800トともいわれ、世界中の海が汚染されつつある。205

0年には、海を漂うプラスチックが魚の総量よりも重くなるという試算もあるほどと指摘した。個人の何気ない行動が、地域に多大な影響を及ぼす事を常に考えなくては、と再認識する。

の車との接触事故を心配して、下車しては確認して、再度駐車スペースに入れようと。この繰り返しが続く。確かに行政機関や各種団体が集中するため、常に駐車スペースは満車状態だ。大北地域の

日々の繰り返される日常の出来事から地域を見つめると、お互いが思いやる気持ちが大切と強く感じる出来事があった。白馬村役場の駐車場での出来事だ。狭い駐車スペースに駐車を試みる年配者、他

他の自治体では、職員が駐車場の別に確保されておき、一般訪問者が駐車に苦慮する認識はないようだ。障がい者スペース以外ならどこでも良いと考えず、高齢化社会到来の中、気軽に使用できる駐車場の在り方がどうあるべきなのかの、訪問者の視点が求められてきていると強く感じている。

行政機能を集約する事は大切だが、集約することによって利用する建物の機能だけでなく、駐車を希望する台数が現施設で可能なのか。可能でなければ、新たなスペースが確保

可能なのか。その為の経費は、妥当なのか。地域交通機関の活用による職員等の利用が制限できないのか。その論議から、地域交通の

在り方の新しい仕組みが考えられるのではないだろうか。
(NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上)



建物近くに駐車される車が勤務する関係者の車でない事を願うばかりだ